

井波律子

中国的
大快楽主義



的大快樂主義

井波律子

作品社





井波律子（いなみ・りつこ）
一九四四年、富山県生まれ。京都
大学文学部卒業。同大学院博士課
程修了。中国文学専攻。現在、国
際日本文化研究センター教授。
著書に、『中国人の機智』（中公新
書）、『中国的レトリックの伝統』
（講談社学術文庫）、『三国志演義』
（岩波新書）、『酒池肉林』（講談社
現代新書）、『破壊の女神―中国史
の女たち』（新書館）、『裏切り者
の中国史』（講談社選書メチエ）、
『中国文学―読書の快楽』（角川書
店）ほか多数。

中国の大快楽主義

一九九八年四月二〇日第一刷印刷
一九九八年四月二五日第一刷発行

著者 井波律子

装丁者 田村義也

発行者 和田肇

発行所 株式会社 作品社

〒103-0043

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四

電話 (03) 326-2975

FAX (03) 326-2975

振替口座〇〇一六〇三二七一八三

本文印刷・製本 中央精版

カバー・扉印刷 栗田印刷

落・乱丁本はお取替え致します

定価はカバーに表示してあります

中国的 大快樂主義

目次

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

第一部★エピキュリアン列伝

- 一、中国の快樂主義について 7
- 二、愉快なエピキュリアンたちの楽しい愚行 15
- 三、後宮伏魔伝——中国の魔女 29
- 四、仙人たちのユートピア——『列仙伝』『神仙伝』をめぐって 46
- 五、「三国志」のトリックスター——『平話』の張飛から『演義』の曹操へ 55
- 六、琅邪の王氏——清談と政治感覚の名族 69
- 七、竹林の奇人たち 80
- 八、六朝貴族と薬 89
- 九、怪異譚の流れ 99
- 十、明末エピキュリアン——張岱・張燕客・秦一・生・祁彪佳 134

十一、明末通俗文学の旗手——馮夢龍について 162

十二、清代文人 袁枚 189

十三、怪奇小説作家 宣鼎——付・小説「少女輕業師の恋」 204

第II部★エピクロスの園

一、夢のミクロコスモス——中国庭園史 231

二、北の中国——反転する地獄装置 250

あとがき 267

初出一覧

第1部



エピキュリアン列伝



一、中国の快樂主義について

中国において漢代以来、人々のタテマエとしての生き方を規定してきた理念は、いうまでもなく「修身・齊家・治国・平天下」、つまり「ために生きること」に価値を見いだす儒家思想であった。しかし、もともと「対句的発想」を身上とする中国の人々は、同時に、「無為自然」をモットーとし、生の喜びを尽くそうとする道家老莊思想を以て、不断に儒家思想の固定軸に揺さぶりをかけ、単一の価値観におおわれた世界に風穴をあけてきた。

こうした道家老莊思想が一世を風靡したのは魏晉南北朝（三世紀初めから六世紀末）、文化史的には六朝と呼ばれる時代である。この時代、中国は大きく南北に分裂し、江南に拠った漢民族の国家もまた、短い周期で王朝が交替するなど、不安定な状態が続いた。こうした乱世の真っ只中にあるながら、トータルに見て、この時代の主役は貴族にはかならなかった。彼らは王朝の主が替わろうがなんのその、平然と生きのび、道家思想にもとづく奇抜なライフスタイルを誇示して、陶酔の時よ来れとばかりに、快樂主義を謳歌した。魏晉貴族の逸話集『世說新語』は、そんな人々の姿を

活写したものである。

魏晋貴族の快樂主義を支えたものは、彼らの生き方の祖型となった「竹林の七賢」以来、なんといつても酒であつた。たとえば、西晋（二六五―三一六）末の名士張翰などは酒浸りで、勝手気ままな振るまいが多く、見かねたある人物が、「好き放題にこの世を楽しむのもけっこうだが、死後の名声を考えないのかね」と言つたところ、張翰はこう答えた。「死後の名声よりも今このとき一杯の酒のほうがいい」（『世說新語』任誕篇）。

酒による酩酊をすべてに優先させるこうした利己的快樂主義は、張翰のみならず、魏晋の貴族に広く見られる現象にはかならない。ちなみに畢卓という東晋（三一七―四二〇）の大酒飲みなどは、「片手に蟹のハサミを持ち、酒の池のなかでバタバタ浮かんでいれば、一生満足だ」と高言して憚らなかつたとされる（任誕篇）。

酒のほかに六朝全体を通じて貴族に人氣があつたのは、五石散と呼ばれる麻薬である。五石散は神経刺激剤であり、これを服用すると気分が異様に高揚する。高揚したところで、貴族たちは道家思想や、当時、流行しはじめた仏教思想をテーマに、「清談」と呼ばれる哲学論をえんえんと戦つてたのだつた。

六朝貴族は、このように酒や薬を媒介として、徹底的に現実の地平を離脱し、非現実の彼方を浮遊することに無上の喜びを覚えた。それは、時代が収拾不能な形で混沌を深めるなかでの、現実逃避だったともいえる。しかし、實際問題としては、変転常なき政治の力の論理に屈服しないために、

貴族たちはあえて政治世界と絶縁し、反儒家的なライフスタイルを選んだのだから、どうしてもその一見逃避的な快樂主義は筋金入りだったのだ。

ただ六朝の快樂主義といっても、誰も彼もが酒だ薬だとエキセントリックだったわけではなく、なかには阮孚（竹林の七賢のメンバー阮咸の息子）のように、なんともとぼけた快樂主義者もいた。この人物は履が好きで、せっせと集めては、火を吹きながら蠟を塗り付け、秘蔵の履コレクションを賞めるように手入れしていた。そしてのんびりため息をつきながら、こう言うのであった。「一生にいったいどれくらいの履がはけることやら」。これも『世説新語』（雅量篇）に見える話だが、このとぼけた履マニアの阮孚が最高の「雅量（教養があり心にゆとりを持つこと）」の持ち主だと絶

喬 雅 量 像



唐寅

贅されたのだから、六朝貴族の快樂主義もなかなか多様だったといえる。

非政治的人間が層をなして出現した六朝の乱世には、有為を強いる儒家思想は貴族たちの多様な快樂主義によってアツケラカンと脱構築された。だが、貴族階級が消滅し、官吏登用試験の科擧が制度化された唐宋、ことに宋以降、儒家思想は、政治システムの根幹となる官僚制を支えるイデオロギー「儒教」として、さらに強化された。こうした儒教の呪縛をはねかえそうとする動きが顕在化するのには、ずっと時代が下り、明（一三六八—一六四四）も中期以降になってからである。

明という時代には、さまざまな新しい動きが見られた。第一に商業が発達し、商人階層があなどりがたい力を持ちはじめたこと。さらにまた、陽明学左派のリーダー李卓吾（一五二七—一六〇二）に代表されるような、官僚制度の支柱たる儒教の欺瞞性をあばき、個人の欲望にもとづく、自由な生き方を求める思想が生まれ、広く知識人の支持を得たことが、そのもっとも主要なものである。

李卓吾の思想は儒教の自己否定ともいえるべき質のものであったから、その意味で、儒家思想の対極に位置する自然重視の道家思想をもつてきて、儒家思想の権力志向をいなそうとした六朝貴族たちより、はるかにラディカルだった。

こうした動きのなかで、明の中期以降、官僚制度からドロップ・アウトして、敢然と自前の人生を歩もうとする知識人が層をなして出現するようになった。十五世紀末から十六世紀前半、当時屈指の大都市だった蘇州に現れた「呉中の四才（祝允明、唐寅、文徵明、徐禎卿の四人を指す）」と呼ばれる文人グループは、そのもっとも早い例である。六朝貴族のように無為徒食するに足る資産の持

ち合わせのない彼らは、売文売画によって生計をたてつつ、飲む打つ買うと存分に楽しみを尽くし、反権力的な「市隠（街の隠者）」の生涯を貫いたのだった。

政治状況が極端に悪化した明末に至ると、こうしてドロップ・アウトした知識人の遊びのテクニクはいつそう洗練の度を加え、その趣味的生活は一種、芸術的な域にまで達するようになる。随筆集『陶庵夢憶』の作者として知られる張岱（一五九七—一六八九？）は、そうした明末のエピキ



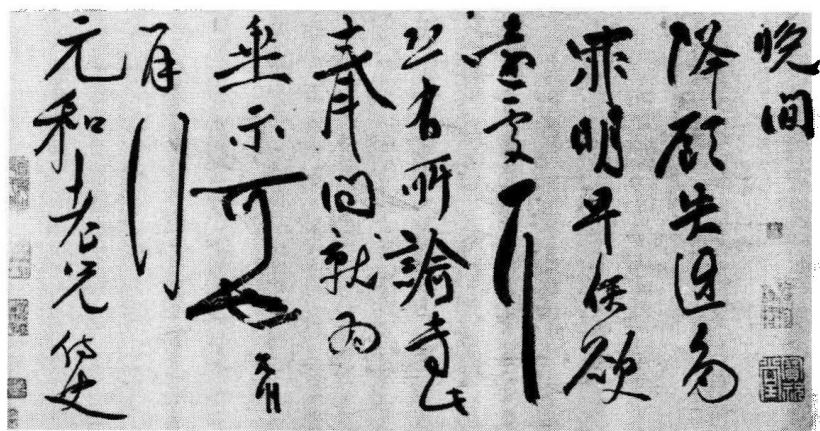
「王蜀宮妓図軸」（唐寅画）

ユリアンを代表する存在にはかならない。張岱は三代続いて進士（科挙合格者）を出した名門の出身だったが、派閥抗争が泥沼化した当時の官僚社会に背を向け（科挙も最初から受験しなかった）、花火、芝居、音楽、書画骨董などに入れあげて、遊び仲間とともに物見遊山に明け暮れた。

張岱は下戸（げこ）だったせいもあって、お茶マニアの水マニアであり、お茶と水の鑑定にかけては、右に出るものがなかった。彼はおいしいお茶を飲むために、まさに精魂を傾けた。たとえば「蘭雪茶」なる銘茶を最上の状態で淹れるために研究を重ね、蘭雪茶にごく少量の茉莉花（もりりか）をまぜてみる。

さらに、特別に汲んできた水質抜群の泉の水を煮立て、何度も実験してタイミングをはかり、サッとその葉のうえにそそぐ。そうすると、なんと「蘭雪茶は竹の皮を剥いだとたんに、緑と白い粉がさっと溶け合うような、あるいはまた、朝まだき山荘の窓の障子ごしに射し込む曙光のような色になった」（『陶庵夢憶』巻三）と、張岱は狂喜する。お茶という不要不急のものにそそがれる、かくまでも過剰な情熱——。まさに趣味に偏するエピキュリアンの面目躍如というところである。酒の池でバタバタしていれば満足だった六朝のエピキュリアンに比べれば、その快樂主義も格段にデリケートな境地に達したというべきであろう。

もっとも、張岱がこんなふうに洗練されたエピキュリアンとして、快樂の日々を送ったのは明の滅亡までだった。明滅亡後、彼は一転、銘茶どころか食べるに事欠く貧窮のどん底に落ちた。しかし、明の高級官僚の多くがあっさり転身して満州族（まんしゅう）の清王朝（しん）に屈服したのは対照的に、無位無官のエピキュリアン張岱は意地を張りとおし、「明の遺民」としての隠遁生活をまっとうした。これ



祝允明(肖像とその書)

は、彼の快樂主義がいかにその脱権力志向と根強く結び付いていたかを示すものである。

こうして見ると、六朝といい明末といい、時代状況が混迷を深めれば深めるほど、人々の間で、私自身の志向にこだわり、ひたすら精神の快樂を求める傾向が強まるといえそうである。現代の文革時代の知識人のなかにも、十数年も文化と絶縁された農村に下放した経験を持ちながら、張岱その人の知話になると異様に目を輝かせ、微に入り細に入り、とたんに饒舌になる人が多い。周期的に激しい轉換期の混乱に見舞われる中国に生きる人々は、おそろしくしたたかであり、私自身の快樂をよすがとして生きぬき、快樂が封ぜられた時は、あえて幻想のなかでしぶとく快樂の夢を紡ぎつつ、理不尽な外部世界の圧迫に抗しつづけようとするのであろう。

本書は以下、六朝と明末に輩出したとびきり愉快なエピソードを中心に、さまざまなスタイルで展開された、中国の大快樂主義の諸相を探ったものである。

（なお、皇帝から大貴族、大商人へと、時代とともにその担い手が移行する中国の快樂主義の歴史の展開については、拙著『酒池肉林——中国の贅沢三昧』（講談社現代新書、九三年刊）を参照されたい。）